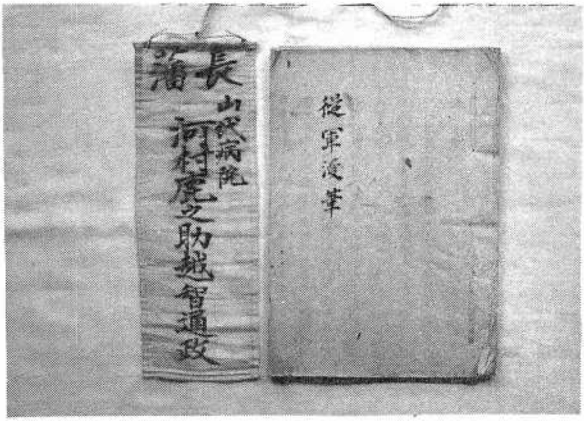
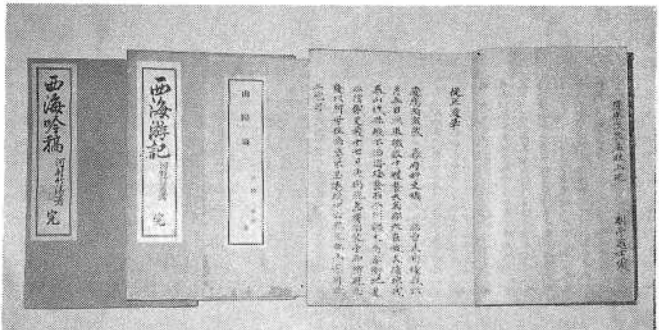
河村竹渓と山陽論

会員　内山英雄

河村竹渓



従軍漫筆



西海游記・西海吟稿

河村竹溪（P30写真）は天保元年二月一六日（一八三〇）中須南村字市（現徳山市）に河村俊岱の二男として生れた。母は町田氏である。通称を鹿之祐名を禎といった。竹溪は号である。天保九年竹溪が八歳の時父俊岱の病没により兄官次（秀之助、春窓）が家督を相続し医業を営んだ。官次が未成年のため叔父孝庵が後見人となっている。孝庵は近所に居住し医師を兼ねて造り酒屋を営んでいた。天保一四年一三歳のとき末武平田（下松市）の人で花岡代官所の医師である内山秀岳の門弟となった。然しそのころの竹溪は心ひそかに医師となるより漢学をもって身を立てたいという希望があったようである。そのため弘化二年一五歳の時京都に上り西嵯峨の天竜寺に寄寓して天竜寺学頭の栖松軒環中老師に師事して儒学・天文学などを修めた。同行者に棟居玄章がいた。

環中老師は玖珂郡玖珂村の高木伊左衛門の三男で、伊三郎といい南河内(岩国市)の福城寺にて得度し、其の後萩の大照院や京都の東福寺・南禅寺等で修行し晩年天竜寺の学頭に就任した名僧である。老師は仏者としては梵暦を研究し儒学者であり和洋の算に通じ漢詩人としても著名であった。竹溪は生涯を通じ老師に対する敬慕の情が深かった。九々斎日記の中に「環中老師ヲ夢ム昔日従学ノ恩ヲ謝ス尊容如在拝謁不堪喜即時起而記之暫滞留之アル者ノ如シ即チ家人ニ告ゲ方丈様ト称シ仕ヘヨト命ゼリ午前二時五十分ナリ」（大正二年九月二十五日）と記載せられてあることをみてもこれを知ることができる。竹溪が一生の間に作った漢詩は約三、四五五首と多いがこれが基本的な指導を受けたのは環中老師からである。

弘化四年一七歳の時徳山村遠石八幡宮の宮司黒神雪崕（直民）の門に入り儒学についてさらに深い教えを受けている。雪崕は国学・儒学の大家で萩明倫館に於いても請せられて講義をしたことがある。又徳山での交友に湯野の福永淑人がいた。

これまで漢学をもって身をたてることを願って精励してきたが嘉永二年一九歳のとき萩明倫館の医学所である済生堂（好生館）に入り、ここで青木周弼（月橋）及び青木研蔵（秋溪）等の大医よりオランダ医学を学んだ。

萩における交友に吉雄公礼（豊前小倉淡窓門下）・深江威一郎（筑前の人淡窓門下）・木下半之烝（肥前島原）・松浦玄暢（播磨）・松浦春洞（石州浜田）・近沢啓蔵（石州浜田）・岩崎俊洞（薩摩）・有馬洞運（小倉）等がいた。それ等の交友の中で吉雄公礼と近沢啓蔵両人の事が九々斎日記にある。それによれば「公礼と交る。文章を論じ切瑳す。

公礼は淡窓広瀬先生の門下にて温柔敦厚秀才にして謙遜、共に知己の盟をなす」又「近沢啓蔵は医に非ず萩森重氏に軍学稽古に来る、後佐久間象山の門に入り吉田松陰と交友する」なお別頁に「嘉永二年萩浜崎森重氏の邸に寓す。石州浜田藩の人近沢啓蔵と交る。啓蔵文を好み、軍学を研究す。佐久間象山に従い吉田松陰と交る。不幸病に罹りて死す」等がある。これらの記事からみて医学の研究の傍ら交友と切磋することによって、これまで習得した儒学に対する反省も生じてきたのではあるまいか。竹溪がこれまで教えを受けた儒学は、朱子学を中心とするものであったようであるが、近沢啓蔵と交際することによって陽明学に心をよせるようになったのではあるまいか。近沢啓蔵の師佐久間象山や啓蔵の友人吉田松陰等が陽明学に傾注したことと何等か関係があるようである。竹溪旧宅（徳山市中須市尾土居）には今も中江藤樹の書等が保存されている。

嘉永六年二三歳萩における医学の研修を終えて中須に帰り医を開業することになった。これまでここで開業していた兄官次は隠居して九州唐津唐房村に於いて開業することになった。

官次が当時としては遠隔地の唐津に出向いたことは彼も又かなりの医師であったため招請されたようである。

慶応二年六月竹溪三六歳のとき四境戦争が起こり、長州側の軍医として広島口の戦争に参加し亀尾川（きびがわ）（美和町秋掛）の野戦病院に九月まで勤務した。従軍中に日記を書いている。

これが後の従軍漫筆（P30写真）である。従軍中母の訃報に接し急遽帰郷葬儀を終えて病院に復帰したことが日記にある。幼少にして父を喪い母の慈愛によって成長した竹溪は母への思慕の情は特に深いものがあったようである。

明治一三年五〇歳のとき二月二七日から四月三日まで、甥の町田義助と娘婿の内富文吾を伴い九州旅行（福岡・長崎・佐賀・熊本・大分）をした。円熟の域に達した竹溪は和服の腰に一瓢と矢立を携えての旅装であった。まだこの地方には汽車のない時代で殆ど徒歩であったが、時には人力車や馬車を利用している。只天草灘と下関から三田尻まで蒸汽船を利用したことは驚喜であったらしい。

この時の旅行記が西海遊記（P30写真）と西海吟稿である。遊記には下関では馬関戦争で戦死した甥の町田道之助の墓を桜山に訪れ、唐津では兄官次の墓参りをしたこと、長崎市内や当時開催されていた長崎博覧会見学を初め天草灘・阿蘇・耶馬溪其他の名所旧跡の探訪、神社仏閣への参詣を中心に旅行中の三人の行動や人間関係等を織り交ぜて漢文で記述された紀行文である。遊記は明治四三年名古屋

進文社より印刷発行されており、岡山閑谷校の西毅一の序文と門人鍵谷徳三郎の跋文があり門人亘理由雄が校正している。門人鍵谷は当時名古屋陸軍幼年学校の漢文教官であったため鍵谷の配慮により進文社より印刷発行されたのである。

西海吟稿には七一首の漢詩が掲載されている。四〇日余の旅行にこれだけの漢詩が作られたことは漢詩人としての竹溪の詩才の秀れていることを推察することができる。

吟稿は遊記の姉妹編ともいうべきもので遊記に記載されてある事象より自然に関連して生れたもので、その背景や理由も述べられており更に竹溪の知友先輩の評語も漢詩の終りに載せられているところもある。この吟稿は明治三四年岡山聚散堂より印刷発行されており、巌谷修（東京）の巻頭の言「天然涌出格韵渾成」の揮毫を最初に次に竹溪の友人達の序・題言があり（多田省・宍戸聿・馬嶋春海）跋は青木忠蔵、校正は岩山武一があたっている。ここに吟稿中の二首を掲載する。

過天草

左望温嶽右天草　舟掠鼇頭[注1]鯨背過
憶得頼翁當日意　孤帆萬里泊烟波

耶馬溪

宿雨新晴緑陰濃　賞山蕨野始停筇[注2]
吟懐自是忙応接　遂次沿溪看怪峰

注1　鼇頭　海がめの頭　注2　筇竹の杖

明治四三年八〇歳のとき竹溪の嗣子にして医師である益三が父のために隠居所を新築した。竹溪が数え年八一歳にあたるので掛け算九々になぞらえてか九々斎といった。竹溪はここで晩年をおくりこれまでの思い出や九々斎での時折の生活の事等を鉛筆をもってノートに記録している。これが九々斎日記である。竹溪の文章の多くが漢文であるが九々斎日記は仮名交りの文語体の文章である。

この九々斎で大正三年一月二六日（一九一四）益三に看取られて数え年八五歳の生涯を終えた。

医師としての竹溪の名声は高く明治になり医師免許制度が実施されるにあたっては、試験官にも実力の程がよく知られていたので無試験で免許状が与えられたという。又患者に接する態度はまことに穏やかで人情味があり薬代支払いの困難である者にはこれを免除し、尚いたわりと励ましの言葉をかけていたといわれるから所謂「医は仁術なり」の言を実行した誠実な医者であった。

一方漢学者としての知名度も高かったので県下は勿論県外からも竹溪を慕って教えを乞う者があった。ここの塾を思斉塾（堂）という。入門者には地方有志・教員・神官・

僧侶・医師の子弟等区々である。門人名簿（従遊姓名録）に二百名余の姓名が記載されている。その中に歌人近藤モヨの夫豊田虎之助や軍歌橘中佐「遼陽城頭夜は更けて有明月の影すごく」の作詩者鍵谷徳三郎（徳山）等の名がある。鍵谷の実力は塾内でも高く竹溪は特に信頼していた。名簿の中に女性二名が見られ、当時としてはかなり向学心のあった方と思われる。塾生の中にはここに宿泊する者もいて村人はこれを書生といっていた。書生の中には漢学生ばかりではなく医学生もいた。

このほか中須には漢詩をつくる同好者の集いである会輔社というのがあって竹溪は会員達の投稿した漢詩原稿の評閲指導にもあたっていた。

医師として又漢学者として高徳な竹溪の晩年中須村の有志や門人達によって頌徳碑建立の議があったが竹溪はもしや子孫に不徳の者でもあった場合まことに申し訳ないとこれをかたく辞退したという。

竹溪著述の中で世間に知られている山陽論は明治三一年岡山市聚散堂より発行されている。山陽論は竹溪のみた頼山陽観であってその論述には特異性があり卓見であると思われる。青年時代京都に遊学し天朝の式微を自らも知り慷慨した竹溪には、山陽の心境と通ずるところがあるのでこうした論文が出来たことと考えられる。全文が漢文であるので全く素養のない筆者が論旨の概要はこうではあるまいかと愚考して次に掲載するので御叱正をお願いしたい。

山陽論概要

題言（はしがき）

世間には山陽先生のことについて論ずる者が多い。私も山陽先生に関する論文（山陽論）を書いてもう数年になる。しかしまだ一般に発表しておらない。というのはもし山陽先生に対して同じような論文を書いておる者があるならば自分は山陽論を書く必要はないからである。私が各種の山陽先生に関する書物を読んでみたが私と同じような意見の論文を発表しておる者はまだない。そこで始めて私の論文を羽峯先生に差し上げて訂正をお願いした。

また古梅・薇山の二人の先生にもお願いして評正してもらった。こうした経過をたどって山陽論を写録（印刷）して著書の終りに白紙数枚を附して、この山陽論をお読みになった世間一般の方々の御高評をお願いいたし、また山陽先生についてまだ世間に知られていないお話しでもあったらお聞かせ願い度いと思う。

それから御批評して下さった三人の先生とも大体同じような御批評であった。以上出版までの経過感想などをつけくわえておく。

明治三一年晩春

私は頼山陽先生の学問が一般の学者より抜群であることと先生の道徳的行為（尊皇精神）が特別に偉大であることを高く評価し敬仰しておる。しかし世間一般はただ先生の書かれた文章の優秀なことのみを高く評価し徳行のすぐれておることについてあまりふれていない。そこで私はこの論文を書いて世間に発表するものである。

世間の人はみんな山陽先生の事業のうちで社会に有益であったものは日本外史や日本政記を著述された事であると。然し私の山陽先生に対する考えは先生の徳行をもって第一とし、著述の方は第二と考えている。その理由は先生の心の中には推測することの出来ない程の深い深い苦悩や深慮のあったことを推察したからである。先生の心の中の苦悩深慮については親子師友へも又世間一般へも決してこれをお知らせにならなかったし、後世の人も知ることが出来なかった。ただお知らせにならなかったというのも一般の人が考える軽い意味のものではない。それであるから先生の苦悩深慮の程が益々強く感得せられる。それなら何故に自分の行為についてお知らせにならなかったのであろうか。

山陽先生のおっしゃるには「自分から言って自分の行為（行動）について人に知らしめることは自分として忍びがたいことであるからであり、人に自分の行為を知られないようにしてはじめて自分の心中は平安であると言われておる。こういうことが山陽先生の行為について私が敬慕する理由である。

以上のことをさらにくわしく申し上げるならば、先生の父にあたる頼春水翁は官位のない庶民より抜擢されて藩公（浅野）に召しかかえられ、学問見識が高いので藩の師表と仰がれるようになられた。その栄誉は大きく藩公に対する御恩も厚いと言わなければならない。

そのためには山陽先生としては父上の後を継いで藩公の御恩に報いられることが一番よいことである。それであるのに山陽先生は父に似ておいでにならない子息であった。今英才である若先生（山陽）にして父の意志に反して家を継がず藩公の御恩にそむいて安芸の国を去られることになる。大体家を継がないことは不孝である。安芸の国を去ることは不義である。不孝や不義は人の悪むところである。頼山陽先生にして不孝不義を行ってこられた心中を察する

にとても推測の出来ない程の忍びざる気持があったことと思われる。
丁度こうした先生の行動をなさった時代は徳川幕府が天下の政権をとって二百年にもなり幕府の威光は非常なものである。この威光をもって諸大名を駆役しており、又諸大名は幕府に対して君臣の礼をもって仕え、皇室のあることを忘れておる時代であった。それであるからたまたま王事（皇室）に忠誠をなす者は一般人は忠誠をなす人を狂人とか世間知らずと思っていた。それであるから大義名分が地に墜ちたというべきである。
山陽先生は聡明特達な方であり幼少のころよりこのことを憤慨しておられた。私はひそかに先生のお気持を推察しておった。たぶん安芸の国の藩公に仕えれば幕府の命令に従わなければならず幕府に仕えると同じようなものである。自分が大義（尊皇）を行わないで、あれこれと著述などで尊皇論を述べることだけでは無益なことであるから、ここで真の大義を行わんとするものである。それには藩公に仕えないことである。然し父上は藩公の臣となっておられる。そこで自分としては父上の気持にそむき藩公に仕えないことを知らすことによって義（大道）となさった。こういう行動をなすことは先生として心中まことに平安でないことである。それであるからこのことを顔色にあらわすことができず又口外に出すことができなかった。父上に対しては自分は多病であるからということを口実とされ藩公に対しては自分は歴史の編纂をすることによって御恩に報いたいと自分の身のふり方を申し上げた。先生の自分の身のふり方について藩公や父上にお願いなさった心境態度は九廻の腸ということばの如く悲壮なものであった。何となればもしお願いして此の事が不可能となった場合は自分の考えておる行い（尊皇の大義）をなすことが出来ず百事がみな廃れることになる。これをもってみても先生の心中の苦悩の程をうかがうことができる。
ところがこの願望がかなって国を去って京都に行くことができてここに寓居を構えられ其後は居所を他国に移されなかった。多分先生の心中を推察するに自分の居所が天皇のお膝元の京都にあれば皇臣ということになり幕府から指図を受ける関係の臣隷でないことになる。こうして一生を通じ勤苦して歴史編纂の事業をなさった。
先生が世間の人に常に言われた言葉に「こうしたことが私の両親や藩公の御恩に報ゆることになるのだ」と又世間の人もこのことを信じて今日まで来ているがほんとうの山陽先生の心中を知る者はない。こういうことによって（以

上のことで）私が頼先生の行為をもって高く評価する理由である。私がいままでにも山陽先生のなさったことを言ったことがあるが「山陽先生は郷里をお去りになるのに節操があり仕官しない態度心境も特異なところもあるが総て尊皇大義の精神に帰一しておるのである」と。それであるから先生の世道人心を裨補（ひほ）するものは著述が第一であると論ずることは末のことである。

世の中の人は自ら之を行わずして人をして之を行わしめようとしている。こういうことは道理にあわぬことである。世間では日本外史や日本政記は大義を明らかにした書物であるといっておる。だが真に世間（日本国）に貢献のあるものは山陽先生の行いであってその次に外史や政記が大義をあきらかにしたものである。これが私の言わんとする行を第一となして著述を第二となす所以である。

跋（あとがき）

山陽論は竹溪河村先生の著作されたものである。先生は多年これを本箱の奥にしまいこんでおられて弟子や旧友などにもいままでに一度もお見せにならなかった。ところが丁度南摩、巌谷、西の諸先生の御批評を得られたので始めて私達にお見せ下さった。元来先生は恭謙な方であるから御自分の詩や文章でも外部に発表することをお好みにならなかった。然し私達は先生の山陽論を世間一般に公表して頼山陽先生の偉業を天下に知らせようと思ったので再三お願いして漸くお許しが出た次第である。思うにこの山陽論が公表されたなら社会の風教に益するところが多いと思い印刷することにした。明治三一年初夏。門人別府文治郎、鵜飼弥之助、亘理由雄僭越ながらあとがきをする。

終りに評正者の読後感想文を載せる。

掲出山陽翁心事。使翁重於鼎呂[注1]。翁必含笑於泉下也。

南摩綱紀妄評

一論一断。発前人所未発。可謂頼翁千歳知己矣。

巌谷　修敬読

山陽先生自稱功罪相償。余亦以不能無間[注2]然于先生之行。以先生言。為當然矣。今読高文。其自罪者。乃所以其有功于世也。浅矣哉余見先生真面目也。　薇山西毅一拝読

注1　鼎呂（ていりょ）　非常に重く尊いもののたとえ

注2　間然（かんぜん）　欠点を示して非難する

（平成二年九月二二日例会発表）